
C 1 A

A n n A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CIA

【Zコード】

N8924D

【作者名】

AnnA

【あらすじ】

私のダイスキな五人の物語です。思い出に変わる前に青春としてみておきたいから…時の流れを止めたいから…

「こんな普通の毎日」に飽きていた私たち。

もつと刺激的な日常生活を送りたかった。そ
ひ…毎日願っていた。

既と曰ふて青春を満喫できたよつな氣がした終業式。

「こんなにも『もつと一緒にいたい』と願ったのは初
めてだった。

中学校一年生。

私立女子中学校に通つ安奈はどういつた特徴はない。

勉強は人並み。

部活

は文化系。

特技はなし。

ていた。

ただ平凡に毎日を過ごし

入学式にこれから一年間一緒に遊びます仲間たちの顔と名前を早く覚えようと必死だった。

「あつせ

私は自分と正反対のこの女の子と気が合っていそうな気がしていた。

キリスト教の学校なので毎朝礼拝がある。

私の隣の席はそのあたりだった。

「よひじくね、あつせち

やん

そつけなく不機嫌そうな顔をしたあたりがよひじくね、とこ

「ほんとうに笑ってくれた。

そして私の中学校生活は始まった。

たちまち私とあつさは仲良くなつた。

「おはよー」

『おはよー』

友達もたくさんできた。

だ。

担任は男で体育の先生

「一番いいのがこのクラス」

「口めこしてやう呼ばれた。

だけど…そんなんでも仲良くできるこのクラスが私は誇りしか
つた。

出会いと別れの季節の春はあつとこつ間に過ぎてこも、誰かが夏を送ってきた。

ある日、あつさはパッシンと私と仲良くなれるのをやめた。

「おはよ～」

『…………』

何かおかしいなあ
なんかしたかな…

私の性格上、大人数との交流は苦手なのであつさと仲良くなつてからは「ありや」「ありさ」でほかの人との交流はまったくなかつたのだ。だから、あつさが私から離れたとき、私はまったく独りだつた。

じのくらい独りだつただろう。

私は寮生だつた。同じ寮生のあやとあつさは仲良くなつていた。

あつさの勝手なの…誰と仲良くしようが

あつさの自由なのに…

入学当初に挨拶してくれたあやが一瞬憎

くなつた。

そして夏休みが始まった。

「元氣でね～」

た。

もうみんながら地元でも気になつて氣になつてゆっくらする事はできなかつた。

『学校に行つたら「おはよー」って言つてくれるかな…あります…』

そつ思ひながら寮に帰つていつた。

寮に帰るともう四時半でお風呂の時間だ
つた。

あやも帰つてきたいた。

一番乗りでお風呂に入ると一番のり　と言しながら
やが入つてきた。

「おかえり～」

『ただいま～』

『ねえ、安奈……？』

「どうしたーー？」

『やつぱりあや、ありで無理だわ』

「なしてーー？」

衝撃の出来事。

『……ベタベタじゃんー？あれ、ちょっと戻へつつか……』

「く……そっか……でもせつ……あやの自由にしたほうが良いこと思つーー。」

『「」めんね……安奈、ありでばすきでしょ？』

「……気にしないでつ……」

初めて……自分が惨めな気持ちになつた。

「ふざけてる」

「ありさがかわいそつ」

人は好きなものをなんでも優先に考えるものだと思つ。

う。

私は……ありさが正しいものだという事が当たり前……それを基準にして物事を考えていた。

なの……あやにも良こ顔をしていたような気がする。

自分

が情けなく思えた。

『ごめんな。あやのことあつらば裏切つたって決め付けてた。

何をしようがあやの勝手なのに、ありさがあや選んだからって

安奈、ありさが正しこうて決め付けていた。
我を通したかったけど、あやを選んだありさ、
ありさの事受け付けなかつたあやを憎んでた。
一人に良い顔していた。『ごめんな』

「いや……あや

「ん、めんね。安奈はあつらの事すじく好きなんだね。

でもだから

「ん、めんに話わなきやつと思つた。

これでもし

安奈があやを嫌いになつても……憎くなつても……

あやは安奈

を嫌いになれないし、これからも仲良くしたいです。

ありさこも

申し訳ないと思つてこる。

あやのせー

でクラスの半分が行き場をなくす事になるのは

わいべ申し

訳ないし、あやの顔が思つ信頼もなくすと想ひ。

「めんね。」

『いや……でも、あつさに話してほしい。その事……
ありわ、ああ見えて結構傷つきやすこいし。
それに、あつさがそれを知らなきゃあつさ……
あやに』

裏切られたって思うかもしないから。
二人が一人良い思いする事はないと思つけど、
言わなきや一人とも後悔すると思つよ。
今でも安奈はやつぱりあつさと仲良くしたい。
だけど、あやとも仲良くしたいから、
これからもよろしくね。』

「「めんね

自分が言

わなきやならない事だけど……

ちよつと

時間がかかりついです」

『安奈から言つておくか……？？』

…。でもあやはあつさにそつぽつ勇気がないや……

「できれば

お願いしたい……」

『いいよつ』

「いつまでも

めんね……』

『いや……』

お風呂から上がった後、手紙の交換をして、私はありますに結構重い想いが宅急便を届ける役目になつた。

これでいいのかな……

一緒にいたい。
離れたくない……

一緒に笑いあいたいよ……

じていた。

その想いだけだつた。また友情が戻る事をしん

「おはよ～

いつもどおりに教室へ入つていった。

晩よく考えてだした…私が言つてはならないと思つた。

あやがあいつたに言わなきゃ…

だからその「手助け」をする事にした。

『「女奈…なんか」の「」のあやが変なんだけど、なんか
知らない?』

ないよ。』

「えつ……寮ではあんまり言つて

あんまり…少しおもひつていたから。

『ふーん。どうしたんだろ…』

「なんか悩んでるんじゃない?』

本当に悩んでるから。

『聞いてみてっ！…』

くねとと思った。

「それはありせ自身があやに聞かな
きやだめだと想つ…」

それがきつかけで私とありせはまた仲良くなつ
た。

結局…言わなかつた。少ししか。

大丈夫…明日も仲良くできぬ…

そう思つ夜が続いていた。

メールの返信が遅れれば、

「嫌われたかな…」と思つたりもした。
とにかく嫌われたくなつた。

結構長く続いた。

気づけば冬休みに入つていた。

ありさはクリスマスは合宿先で過ごすらしい。

運動系に入っているありさは合宿からして船の中など一日中メールをしていた。

モーニングメールも届いた。

うれしかった。

冬休み明けに行つた席替えで私とありさの席は近くなつた。

ありさの右はサヤカという、ありさの一番嫌いな人物だつた。

斜め後ろはあや…サヤカの後ろだ。

また一人の友情が蘇つたらどうしよう…とも思った。自分がありさに依存していた事に気づかされたのはもっと後の事だった。

だけど…近くにはあやが入学式から一緒にいたエマもいた。少し安心した。

席替えがきっかけで、安奈、ありさ、あや、エマ…あと一人…安奈の右の席のカノコとも仲良くなつた。クラスの中心的人物となつた。

皆は私たち五人を怖がり、逆らおうとしなかつた。

一言でいふと…『調子に乗つていた』

私が思つたとおり、あやとありさはよくつむむようになつていつた。

二人ともすきだつたから別によかつた。

だけど…辛かつた。

何かを話すとき…ありさが呼ぶのは私だつた。

『あや～』…呼び声はいつの間にか変わつていた。

うれしいのはわかつていた。

ありさが一番このグループになる事を望んでいた事は知つていた。

だけど…それが私にとつて幸せなものだと私自身も思い込んでいた。

精神的に弱つていつて、誰でもいいから話を聞いてほしいくて…

そんなとき、Hマが私に言つてくれた。

『安奈元気ないー』

「そ、う、?」

『不安なの?』

「何が?」

『二人…?』

「……」

『メールするからー』

本当はうれしかった。気づいてくれる人がいて。

夜の九時にメールが届いた。

「メールしてみた一笑」

『どした――『塚ど』まで話した…?』

「あやがちょっと嫌的な」と

『いやいや…むしろ好きだけど
だけど…一人が孤立しそうで怖い…』

あんなは あつと仲良くしたい

「わかる Hママも好きだし。
あやも
あつとも

くないし…』

『笛と仲良くしたいんだけど…

安奈あやみみたいに面白くなこし…ノリよ

「てかでか Hママも
あんなの立場だつたら
あんまいい気はしないけどねー」

「系なんでしょうー? ?

でもあやがいるからーみたいな

『あやが邪魔とかじゃないんだけど…
言葉かえると取られそうで怖いっていうか…
ありさの自由だからどこにいっても関係ないんだ
けど…』

「つーか あんなもエマも
なんとなく 立場??的なの
似てるじゃん

ありさとあや 趣味とか
あうからしじょうがないのかもしだれないけど
ちょっと 悪く言ひと勝手じゃん」

『悪くいうとね…

今のがグループダイスキだし、一緒にいたいけ

ど、ど、ど、ど

「あー えまもこんな事望んでなかつたー
四人で仲良くできるのかと思つてた
でも今実際いい氣してるのはありさとあやだけじゃん? ?
二人が悪いとかじやないけどね。

だつてさ あやとかエマとか
てか、前自分が一緒にいた人がありさば 仲間はずれ的

な事しちゃつたじゃん。

そのときでも あんな ありさのまう行つた? 行つてあげた?

まあ そんなことしたのに

あやがありさの事好きになつたら あんなど 謝る回数が減つたとかあんなかわいそつだと 思つさ 「

『もつすぐでクラスはなれるからその時にあやありさが離れてほし』
とか望んでたりもしたさ。。。

だけど…やっぱり怖いし…ありさがあや取つ

たら

安奈…このグループから抜けざる負えないな
……』

「でも頑張れば我慢はできるとゆづき ハマはね。
あんなもを もっと話に入つて来ればいいじゃん!!!!

!!

なんかマンガ? アニメ? の話されると入つていけないけど…

あと十何日しかないからそー

クラスも離れる可能性大だし…今よりは関係 悪くした

くない

『一人が笑つてると…面白い話なのかもしけないけど

自分が。

なんとか笑えないし……意味わかんなくなる、

だんだんとめでいくつていうか、分からぬ。
理解しようともしなくなる。

それが悔しいの』

「ショットチャードよ
意味わかんないさ（笑）
二人が爆笑しても
わかんないからなんも笑えないし
でもあやとありが離れる事はないよ思つから
やっぱしようがないかなつてなるし
二人だけで話すなとか言つ権利ないし」

『怖いさ、とにかく怖いの。
なんでこんなに依存してんのかなーって思つし
クラスがもし離れても行き来したら
どうちにしても立場なくなっちゃうのかな
ーとか思つし。』

「クラス離れたらそこまでは仲良くなんないと思つたぶん
最初は行つたりきたりすると思つけど……。
なんかしようがないしかいえないんだけど（泣）
ため息ばっかりで嫌になる……
怖いのはわかるよ　ヒマもだし」

『だつたらいいな……

そう思つちゃだめなのかもしれないけど
いつの間にか思つてるから
やつぱり依存してるんだなって思つ。

怖いや。』

「辛い…

グループから外れそ�でマジやだ エマは——

あやと仲良くしたい てか 今のグループ監と仲良くしたい

一番とかなくて皆が同じくらいで

あやとありさが仲良くしてても嫉妬的なしたくないし
五人が皆誰とでもいれるみたいな

無理なんだけどねー』

『ありさに嫌われたら… つて

好かれたいとか思つの… 特別扱いしちゃ

だめなのに

なんでもありさを基準にして考えてるの…
でも…あやはエマの事一番に考えてると

思つよ

昨日の放課後とか…

だから大丈夫だよ』

「あんな 結構限界きちゃつてる系だねー

ありが今どう思つてるのかはわかんないけど…

あんな ありさの事、好きなんだなつて見ててわかる

これ 言つてもいいのかわかんないけど

この際言つても罰あたらないべ

ありさね、前 最近あんな話に入つてこなくない?

なんかよくわかんない つて言つてたから

ありさも、あんなの気持ち分かつてないと思つ

悪い意味じゃないと思つ □調からして

あや そだつたらいいな

いつつも一緒にいなくていいから

普段ありさと一緒にいていいから

相談とかはエマに言つてほしい。

今は結構相談とかしてくれるし

「今は結構相談とかしてくれるし」

『自分必要なのかなーと思つ。

楽しいのが一番いいのかもしね

けど、

… ここのはじの思つ

好きなんだなーて実感するから

思つたらなんか泣けてきてやつぱり

また一緒にいたいって思つて学校に

も行けてた。

授業中とか手紙まわすのはあやが初

めだし…』

「今 泣いてる系 笑

だよね 授業中も話しかけるつたらあやだし

一番辛いの安奈じゃんー

崩れんなよ（汗）

なんか あやとあつむ話してることや、楽しそうだから

余計入りづらこし…

自分がなくてこいつの気がある…』

『自分が間違ってるのかもしれない

けど

いつ

あつちだつて間違えてないから…

今までは何があつても

お弁当のときだけはカノコもいれ
ないで

いたつてことは

一人で食べてたの。だけどくつ

たのかーて思った

せめてお弁当のときだけはあつさ

と普通に

なくなつて。』

22

「あんな間違えてなくない? いろんなこと
でもあやとかありさとか間違えているわけでもないじやん
一緒にいたいし ハマも

でもそのせいでばあされるなつ皿分勝手だけじゃつぱつ

やだ

普通ならそういう思うよね… てかそう思いたい。

なんかどつちが悪いとかじゃないよね…

だからどうすればいいのかわかんないー

初めてだよ こんなに人間関係で悩むの
お弁当は結構痛いじやん。。。』

『……邪魔つて思いたくない
でもこのままだつたら

安奈 あやば嫌いになつたつで嫌

だわ。

『仲良くしてほしこんだけじでも

一人つ あつはやめてほしこつてか』

「ありさと仲良くしてほしくないわけじゃないけど
なんか嫌なんでしょうてかエマももうなんだけど
……嫉妬じゃない。

仲良くしてほしくない訳じゃない
一緒にいてほしいとか言つてるけど
どうかであいつがいなければって思つてるよーな気がする
そー思つ自分が本当に嫌になつてくる
マジ ずるいなつて、分かつてるけど思つちやう
マジ 自分 つわー」

『でもありさの好きにしてほしこ
いわ。

『エマずるくないべ…

こんな依存してて自分気持ち悪

「うふ。当たり前だ。普通だよ
好きなのに嫉妬しなかつたら好きじゃないって事じゃん
エマもすきなよつにしてほし
それであやがエマを選んでくれたらエマとまだ
仲良くしてくれたらその時は一緒にいる
今はこれまでどおり接して
ありさと喋つてもそれでいいつて思つ
思えるかどーかは分からぬけど…』

『エマすわーいね…

やつぱり強いね
見習いたいわ』

「すゞくないよ 本当にそういうできるかわかないし
すんごく不安だし…」

安奈大丈夫だつて

こんだけ好きなんだから WWWWW

選ぶってか皆でいるのが一番なんだけどね WWWW

『本当にありがとうね WWWW
すっごく安心つてか落ち着いて
たつてか』

「エマの方がどーもね
頑張れ あんな・エマ わ」

安心した。

やつぱり皆悩み事を抱えているんだな、と改めて実感した。
でも…あいさも何か悩んでるのかなーと思つた。
あえて…ふれないでおこづ。

じやなきや自分は前に進めないような気がした。

それから一週間後くらいだった。

私とエマ以外が先生に呼び出されて普段の生活態度、授業態度について注意した。

そしてそれから三日後に五人全員が呼び出されて
一人づつ先生がつき、

授業中に携帯電話でメールをしていた事がばれた。

誰かの告げ口。

たぶん犯人はサヤカだった。

バレた次の日から一日間サヤカは学校を休んだ。

反省文一枚で許されたが、高校でこのような事をしたら休学処分だつたらしい。

つくづく中学生でよかつたと思った。

先生には「信頼をなくした」など色々言われた。

でも…迫力はつまみ食いをした子供を母親が怒りつける、程度だつた。

まず…どうなかつた。

皆は経験済みだと言い、笑えた。

親にも電話をされて、あせつたのをおぼえている。

春休みに帰つたら怒鳴られるのかなーと少しビビッていたけれども普通どおり迎えてくれた。

一年最後の思い出は少し苦いもので終わつたが、
たぶんクラス替えで離れ離れになつても
五人のキズナはなくならないと実感した。
……私も五人の仲間入りだつて言う事にうれしかつた。

実は注意された前の日に、カラオケやボーリング場へ行つた。

自転車で行つたのだが、私は寮生なのでありさの自転車を借りて

遊びに行つた。ありさの家には以前一回行つたことがあったが、

改めてうれしかつた。Hマの自転車を借りるのにあやはHマの家に

行つたらしい。Hマ…うれしかったのかな…
でも、カラオケであやとありさが「ラボしているのを見ると
やつぱりショックになった。

「あやは遠慮するのもされるのも嫌い

隠し事は一番嫌」

寮内でそういわれた。

部屋替えの日。

私はあやにHマとのメールをみせて、
自分が思っていたことを言つた。

Hマの携帯にあやからメールがきたらしくて
Hマはあやに謝られたといった。
自分最低だ、といったらしい。

私は自分は隠し事されるのを嫌がつていたから
打ち明けただけなのにあやがそれをみて
元気をなくしたのをみて
メールを送つた。

「あや 最低じゃないよ
安奈はあやば好きだよ。
最低じゃないよ

『じめんね…』

なんだか申し訳なつた。

そして卒業式。

中3が旅立つた。

次の日は…

思い出に残った終業式だった。

『おはよ～』

一年A組でも最後の「おはよ～」

カメラを持ち込んで五人で写真をとった。

皆…笑顔を絶やさなかつた。

そんな四人を見て…うれしくなつた。

もつと一緒にいたいな…

クラスが離れても…仲良しだよね…

放課後…教室の壁で背丈をはかり、
ボールペンでしるしをつけた。

『卒業するときにまたはかりに来ようよ～』

五人の身長差をみて爆笑した。

あやとエマと三人でクレープを食べて、
プリクラを撮つて帰つた。

思い出したら笑つてた。
いつもなら泣いていた。

『ばいばい』

とありますとカノコに言った。

二人は

「ばいばい、またね」

といった。

また一緒になるかな／＼・・・

今は春休み。

ときどき皆とメールをしながら
『クラス一緒にがいいねー』
つて話しています。

私以外皆運動系だし、

中2になつたら勉強も難しくなると思う。
だから遊ぶ事もできなくなるかもしない。
だけど…

いつまでもなかよしだよ…

皆は安奈にとって
大親友であり、

大切な仲間だからね

入学当時はなにもかも不安だった。
だけど今は違う。

新しく始まる日々にわくわくしています。
まだまだ未熟な私だけ
これからもよろしくね。
… そう思います。

大人になつていく中で
良い経験をしたな、と思います。

喧嘩をした次の日にはもう二人は別人。
そんな日もあつたよね。
だけど…あの喧嘩にも後悔していません。
全て…思い出に変わる前に…
青春の思い出に変えておきたいです。
そして…タイムカプセルのように
いつの日か五人であけたいね。
今はそういうことしかいえないから
もっと勉強して…良い大学入って
頭良くなつて信頼されるようにして…
だけど…まだまだ未熟だけど…

いつか夢を実現させてやる。

私は…故郷と自分の夢を天秤にかけていた。

ダイスキなこの街と自分の夢…

ダイスキだけどいまのままでは自分は
小説家にはなれない。。。
よしつ…故郷に未練はない。

そうして私は小説家になりたかつたから私立中学校に入学した。
初めは友達とか人間関係はどうでもよかつた。
ただ勉強して良い大学に入るために必死だつた。
だけど…担任の先生に言われた事で目が覚めたような気がします。

「なんのためにこの学校に入学した?

勉強だけか?違うだろ。

友情関係、人間関係とかも学習しなきやいけねんじやねえのか?
そんな勉強だけの人生、勉強だけで過ごした青春時代を
あとになつて後悔しないで生きていけるのか?
そりや勉強も大事なのかもしれないけど、
もう少し「本当の自分」をだしていいんじやねえのか?」

ああ……そういえばそうだったなあ……

改めて親が反対せずに中学校から故郷を離れさせてくれた想いが解つたような気がした。

また…頑張ろうと思えた。

自分は風よりも存在がないんじゃないかな?

そう人間関係で悩んだときもあった。

いつの間にか…学習していたんだな、と気づかされた。

私には兄妹がいる。三人兄妹だ。

そして私は真ん中なので喧嘩をしたらいつも味方がいない。

喧嘩するたび、なんなんだろ… そう思うが、

「嫌い」「死ねばいいのに…」

そういう感情はまったくない。

やっぱり本心は好きなんだな。と思う。

そこでも学習していた自分が在った。

思い出を忘れていくのを恐れてた。
時間が経つのを恐れていた。

だけど…それは充実してた日々だったから
幸せすぎて思い出せないんだとわかつた。
まだ全然生きてはいないけれど、

それなりにオリジナルの人生があつた。
生きている事が当たり前だった。

なのに死んでいくことに恐れていた。

だけど…天国や地獄は信じている。
自分はなんなんだろ… と思った。

大切ななのだ。

恋愛よりも… 友情だ。

女子校だからそう思ったのかもしれない。
だけど… 友達の在り難さに気づけた。

少し大人になつたかな?と過去の自分に問い合わせてみる。

まだまだ子供。 だけど… 成長したね

そつ言つてくれているような気がした。

作成日：2008.02.19

作者
：A N N A

まだまだ未熟な私ですが、
なにかアドバイスがあつたら書き込みお願いします。
処女作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924d/>

C1A

2010年12月26日22時51分発行